

研究ノート

## 13、14世紀のアムール河下流域の寒冷化についての事例提供

A case study of cooling in the lower Amur basin in the 13th and  
14th century

中村和之

NAKAMURA Kazuyuki

### Abstract

During the 13th and 14th centuries, the water in the lower Amur basin began to freeze. This climatic event lasted from the eighth month of the lunar calendar until the fourth or fifth month of the following year when thawing began. Such records are found in the Chinese historical sources of the 13th and 14th centuries. Compared with early 20th century data, it can be seen that the climate in the 13th and 14th centuries was cold. The example shows evidence of cooling in the high latitudes of Eurasia.

KeyWords : Cooling, Amur River, Mongol Empire, Yuan Dynasty, Ainu

## 1. はじめに

近年、古環境の復元と歴史学・考古学との協働の分野で、あたらしい研究成果がつぎつぎと発表され、中世史の分野でも成果が得られている〔中塚、伊藤・田村・水野 2020〕。そのなかでも史料言語へのアクセスの容易さから、日本の学会では古気象学と日本史学との連携が進められている。それは、日本で行われている研究であることからすれば、当然のことといえる。また日本語史料が持っている公文書・私文書の種類の多様さ、詳細さがこのような共同研究を支えているということもできよう。しかし、グローバルな古環境の復元と歴史事象との関係を検討しようとするれば、日本語史料がカバーする範囲を乗り越え、より広い範囲の記録を検討する必要が生まれて来る。

本稿は、13、14 世紀のアムール河下流域に寒冷化が起きていたのではないかとと思われる漢語史料を紹介し、その内容について検討するものである。

## 2. 13 世紀後半のアムール河下流域の寒冷化についての記述

まず本稿で紹介したい事例は、周密『癸辛雜識』続集上、狗站、という史料である〔周 1988 : 133〕。以下本稿では、まず史料原文を引用し、つぎに筆者による訳をあげる。

伯機云「高麗以北地名別十八〔華言乃五國城也〕。其地極寒、海水皆冰。自八月即合、直至來年四五月方解。人物行其上、如履平地。站車往來、悉用四狗挽之、其去如飛。其狗悉諳人性。至站亦破狗分例、稍不如儀、必至嚙死其人。」  
 伯機が云うには「高麗以北の地名は別十八〔華言では乃ち五国城のことで也〕という。其の地は極めて寒く、海水は皆氷る。八月より即ち合し、來年の四、五月に直至って方て解ける。人と物が其の上を行むこと、平地を履む如である。站車の往來には、悉ず四（匹の）狗を用いて之を挽かせ、其の去は飛ぶ如である。其の狗は悉く人の性を諳んじている。站に至いても亦狗への（食料の）分の例を破り、稍でも儀の如に不なければ、（狗は）必ず其の人を嚙んで死すに至る」と。  
 『癸辛雜識』は、南宋時代末期から元時代初めの文人である周密（1232～1298）の著作で、彼が臨安（現在の杭州）の癸辛街に住んで見聞きした出来事を記録したものである。『癸辛雜識』は当時の社会状況を知る重要な史料とされ、前集 1 卷・

後集 1 巻・別集 2 巻の内容は主として南宋に関し、続集 2 巻は元初の記事が多い [神田・山根 1989 : 45]。続集に納められたこの狗站も、元初の記録と考えられる。

さて周密があげている伯機とは、元代の書家として有名な鮮于枢(1256~1301)のことで、伯機は鮮于枢の<sup>あざな</sup>字である。鮮于枢は、ウイグル人の政治家である廉希尹と親しい関係にあった。廉希尹は、クビライ・カアンに重く用いられた廉希憲(1231~1280)の弟である。劉迎勝氏は上記の狗站の内容が記された経緯について、まず廉希憲がアムール河下流域の状況を知りうる立場にあり、その知識が弟の廉希尹を経て鮮于枢にもたらされ、さらにその言が周密によって記録されたと推定している [劉 2010]。従うべき説であろう。劉氏が指摘されるように、五国城は五国頭城ともいい、1126~1127 年の靖康の変で捕虜となった北宋の二人の皇帝、徽宗と欽宗が幽閉されたところとして知られている。

元代のアムール河中・下流域に居住していた諸集団については、いくつかの統轄機関が設置されていた。統轄する機関と統轄対象の集団については、つぎのような関係になっていた。合<sup>ごうらんふ</sup>蘭府が南方の統治の拠点として女真を統轄し、松花江流域からアムール中・下流域に設置された五<sup>ばんこふ</sup>万戸府が北方の水<sup>すいたつたつ</sup>達達を統轄していた。五万戸府とは、桃<sup>とうおん</sup>温・胡<sup>こりかい</sup>里改・斡<sup>あつだりん</sup>朶<sup>だつあつりん</sup>憐・脱<sup>ぼつくこう</sup>斡憐・孛<sup>ぼつくこう</sup>苦江という五つの軍民万戸府のことである。水達達という語は、元代になって用いられるようになったもので、モンゴル語で *usu irgen* つまり水の民という意味である [薛 2012]。もっとも北に位置する集団を統轄していたのは管<sup>かん</sup>兀<sup>ウジエ</sup>者<sup>ウジエ</sup>吉<sup>ギ</sup>列<sup>レ</sup>迷<sup>ミ</sup>万<sup>ばん</sup>戸<sup>こふ</sup>府であり、兀<sup>ウジエ</sup>者<sup>ウジエ</sup>と吉<sup>ギ</sup>列<sup>レ</sup>迷<sup>ミ</sup>を統轄していた。兀<sup>ウジエ</sup>者<sup>ウジエ</sup>とはツングース系のウデへと名称のうえでつながるため、ツングース系の集団と考えられる。また吉<sup>ギ</sup>列<sup>レ</sup>迷<sup>ミ</sup>は、吉里迷、吉烈迷などとも書くが、ツングース諸語でニヴフ(旧称はギリヤーク)を呼ぶ、*gillemi* を漢字の音で宛てたものである。ニヴフは古アジア系の民族で、アムール河下流域とサハリン島(旧称は樺太)に居住し、狩猟・漁撈を生業とする。

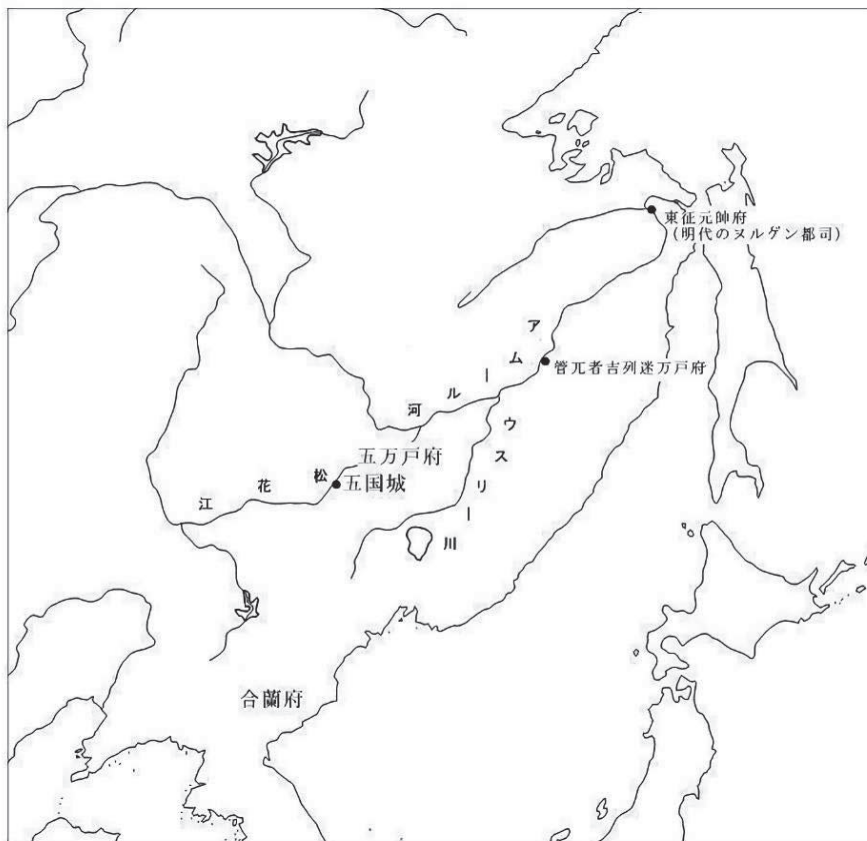


図 1. 13、14 世紀のモンゴル帝国・元朝のアムール河流域における支配体制

さて筆者は、五つの城（ないし街）を意味するビシュバリク（Beš-baliq）というトルコ語系の地名が、アムール河流域でもここにだけあることに注目している。この地名は突厥<sup>とっけつ</sup>などトルコ系の勢力が力をもった、より古い時代にこの地域に付けられたもので、時間の経過のために意味が忘れられてしまっていたが、トルコ系のウイグル人である廉希憲・廉希憲兄弟は、音を聞いて正しく意味を理解できたから、別十八が漢語で五国城と呼ばれていることの原因を、鮮于枢に伝えたのであろうとの仮説を発表している [中村 2020]。

それでは、高麗以北の別十八の方向で海が凍るというのは、どこのことを記したもののなかについて検討しよう。『癸辛雜識』では、今ひとつ明確ではないが、陶宗儀『南村輟耕録』卷 8、狗站、の記述によって [陶 1959 : 97]、アムール河の下流域、とくに河口近くのことであることがわかる。

高麗以北名別十八、華言連五城也。罪人之流奴兒干者、必經此。其地極寒、海亦冰。自八月即合、至明年四五月方解、人行其上、如履平地。征東行省每歲委官至奴兒干、給散囚糧、須用站車、每車以四狗挽之。狗悉諳人性。站有狗分例、若尅減之、必嚙其主者、至死乃已。

高麗以北（の地）は、別十八と名が、華言では連五城のことで也。罪人の奴兒干に流される者は、必ず此を経する。其の地は極めて寒く、海も亦氷る。八月自り即ち合し、明年の四、五月に至って方て解ける。人が其の上を行むこと、平地を履む如である。征東行省は毎歳官を委して奴兒干に至らせ、囚の糧を給散しているが、（それには）須て站車を用いる。車毎に四匹の狗を以て之を挽かせるが、狗は悉く人の性を諳んじている。站には狗への（食料の）分の例が有って、若し之を尅減すれば、必ず其の主者を嚙んで、死に至りて乃ち已む。

『南村輟耕録』は1366年（至正26）に完成した随筆集であるから〔神田・山根1989：253～254〕、陶宗儀が『癸辛雜識』をもとにこの文章を残したことは間違いない。ただ、征東行省などの役所名や奴兒干というアムール河下流域の地名が記されていることは、『癸辛雜識』以降の知識が盛り込まれていることを示す。それとともに、『癸辛雜識』の狗站はアムール河の下流域についての記述だということがわかるのである。

### 3. モンゴル帝国・元朝のアイヌへの攻撃

それでは、『癸辛雜識』のアムール河下流域に於いての記載は、いつごろ書かれたものであろうか。またここに記された気象は、いつごろの事象を書いたとすべきであろうか。著者の周密は南宋の首都の臨安に住んでいたが、臨安は1276年（徳祐2年）にモンゴル帝国（1271年以降は元朝）のバヤンが率いる軍に占領され、これによって南宋は実質的に滅亡した。周密が狗站の記事を書くことができたのは、元朝の支配下に入った1276年から没年の1298年までの間と考えるべきである。

ただ、モンゴル帝国がアムール河下流域に勢力を伸ばしたのは、それをさかのぼる時期であった。元朝の正史である『元史』には、1264年以降、骨嵬について

での記述がみえる。骨嵬とはアイヌのことであり、オルチャ語などのツングース諸語や、古アジア語系のニヴフ語などでアイヌを意味する *kuŋi*~*kuŋi*~*kui* を漢字の音で宛てたものである。『元史』巻5、世祖本紀2、至元元年11月辛巳（西暦の1264年11月30日、以下同じ）、には以下のようにある [宋1976:100]。これが『元史』に記された骨嵬についての最も古い記録である。

征骨嵬。先是、吉里迷内附、言其國東有骨嵬・亦里于兩部、歲來侵疆、故往征之。

骨嵬を征した。是より先、吉里迷が内附し、其の国の東に骨嵬と亦里于という両つの部が有って、歳来て疆を侵すと言った、故に往して之を征した。

ここでは、モンゴル軍は骨嵬と亦里于が吉里迷の境界を侵すという訴えを受けて、骨嵬を征伐したと記されている。ただしこれは、あくまでモンゴル側による記述であることに留意しなければならない。なお、亦里于は『元史』のここにしか見られないため、どのような集団か詳細は不明である。つぎの記録は、『元史』巻6、世祖本紀3、至元2年3月癸酉（1265年3月22日）に [宋1976:106]、

骨嵬國人襲殺吉里迷部兵、敕以官粟及弓甲給之。

骨嵬の国の人々が吉里迷部の兵を襲い殺したので、敕で官の粟及び弓と甲を以て之に給えた。

とあるように、さきの史料と同様に、骨嵬が吉里迷を攻撃しているため、モンゴル側は食料や武器の援助をしている。これに対して、『元史』巻8、世祖本紀5、至元10年9月壬寅（1273年11月4日）には [宋1976:151]、

征東招討使塔匣刺請征骨嵬部、不允。

征東招討使の塔匣刺が骨嵬部を征することを請うたが、（皇帝はこれを）允さなかった。

とあるように、モンゴル側から骨嵬を攻撃することを計画したこともあったが、実現しなかったようである。その後、『元史』巻12、世祖本紀9、至元20年7月丙辰（1283年7月29日）には [宋1976:255]、

免徵骨嵬軍賦。

骨嵬の軍賦を徵することを免する。

とある。この史料は解釈が難しい。元朝が骨嵬から軍の賦税を徴収しており、そ

の徴収を免除したと読むべきであろうが、元朝が骨嵬から賦税を徴収していたという記述はほかになく、むしろ吉里迷が元朝の支配下に組み込まれていたのに対し、骨嵬は元朝の支配体制の外にあったことが判明している[中村 2021b]。また、つぎに紹介する 1284 年の記事から連続して 3 年間、元朝は骨嵬を攻撃している。その前年の 1283 年に賦税の徴収を免除する事実とつじつまが合わない。この史料の解釈については、今後の課題としたい。

1284 年から、元朝は連続して骨嵬を攻撃する。『元史』巻 13、世祖本紀 10、至元 21 年 8 月辛亥（1284 年 9 月 16 日）には [宋 1976 : 269]、

征東招討司聶古帶言「有旨進討骨嵬、而阿里海牙・朶剌帶・玉典三軍皆後期。

七月之後、海風方高、糧仗船重、深虞不測、姑宜少緩。」從之。

征東招討司の聶古帶が「進んで骨嵬を討てとの旨みことりがあったが、而し阿里海牙・朶剌帶・玉典の三さんの軍は皆期みなじきに後た。七月之後、海風は方も高く、糧と仗ぶきで船が重く、深く不測ふそくを虞おそれるため、姑く宜く少し緩ゆるべきである。」と言う。之に從したがう。

とあり、骨嵬を討てという皇帝の命令に対して、現地の指揮官はしばらく待機したいとの意見を具申している。なお、ここでいう阿里海牙は、『元史』巻 128 に列伝のあるウイグル人の武将で、南宋平定で功績を残した阿里海牙とは別人である。しかし『元史』巻 13、世祖本紀 10、至元 21 年 10 月辛酉（1284 年 11 月 25 日）に [宋 1976 : 269]、

征東招討司以兵征骨嵬。

征東招討司は兵を以て骨嵬を征せいした。

とあるように、骨嵬への攻撃は結局、実施された。その理由は不明である。続いて 1285 年にも骨嵬への攻撃は続いた。『元史』巻 13、世祖本紀 10、至元 22 年正月辛丑（1285 年 3 月 5 日）に [宋 1976 : 273]、

以楊兀魯帶爲征骨嵬招討使、佩二珠虎符。

楊兀魯帶を以て征骨嵬招討使と爲し、二珠の虎符を佩おびる。

とある。この楊兀魯帶は、モンゴル人風の名前を名乗っているが、楊という漢人風の姓があるため、モンゴル人である可能性は低い。漢人風の姓を持っているということから、おそらく女真人ないしウイグル人かと思われる。『元史』巻 13、世祖本紀 10、至元 22 年 10 月乙巳（1285 年 11 月 4 日）に [宋 1976 : 280]、



詔征東招討使塔塔兒帶・楊兀魯帶以萬人征骨嵬、因授楊兀魯帶三珠虎符、爲征東宣慰使都元帥。

征東招討使塔塔兒帶・楊兀魯帶に詔して万人を以て骨嵬を征させ、因つて楊兀魯帶に三珠の虎符を授け、征東宣慰使都元帥と爲す。

とある。さらに『元史』巻14、世祖本紀11、至元23年10月己酉（1286年11月3日）には〔宋1976：292〕、

遣塔塔兒帶・楊兀魯帶以兵萬人、船千艘征骨嵬。

塔塔兒帶・楊兀魯帶を遣し兵万人、船千艘を以て骨嵬を征した。

とあるように、元朝は1284年・85年・86年と連続して骨嵬を攻撃した。なおこの後、骨嵬に関する言及は『元史』にはみえない。

このような事実からみれば、モンゴル帝国・元朝がアムール河の下流域の状況を詳しく知るようになったのは、1264年以降のことで、とくに1284年・85年・86年の3年連続して骨嵬を攻撃した時期である可能性が高いといえる。

#### 4. 13、14世紀のアムール河下流域の結氷期と解氷期

周密『癸辛雜識』続集上、狗站、に記されているように、アムール河の下流域は旧暦の8月に結氷し始め、翌年の旧暦4、5月に解氷する。旧暦はときに閏月が置かれるため、現在の季節感ではやや理解しづらい。モンゴル帝国・元朝がアムール河下流域に軍を進めた時期として、さきに検討したように1264年から1286年の23年間を取り上げ、旧暦の4月、5月、8月を西暦（ユリウス暦）の日付に換算し<sup>2)</sup>、さらにその平均値を求めることとする。もちろん元朝の記録によれば、少なくとも1308年（至大元）まで元軍がアムール河下流域で活動していたことがわかる。しかし周密の没年を考えると、だいたいこの範囲で平均を求めることも誤りとはいえないであろう。

後掲の表1の1番から23番までが、1264年から1286年の旧暦の4月、5月、8月を西暦に換算した日付であり、24番はその平均値である。旧暦4月は西暦の5月1日～5月29日、旧暦5月は西暦の5月30日～6月28日、旧暦8月は西暦の8月30日から9月28日ということになる。この数値を比較する対象として、旧海軍水路部が1930年に刊行した『西伯利亞東岸水路誌』を検討してみよう〔水路部1930：28～29〕。



間宮海峡及黒龍海灣 結氷ハ概ネ 11 月中旬ヨリ始マリ 12 月上旬ニハ海峡北方黒龍海灣内ハ一大氷原ト化スルモノノ如ク、樺太西岸ハ氷原一帯ニ凸凹起伏スルコト激シキヲ以テ橈ノ運行甚ダ困難ナルモ海灣中央及其ノ以西ハ平坦ニシテ橈ノ交通容易ナリ。解氷ハ間宮海峡ニ於テハ 4 月中旬頃韃靼海灣方面ヨリ始マリ概ネ潮流ノ線ニ沿ヒ北進シ、5 月中旬迄ニ海峡南部ハ全般ニ互リ解氷シ船舶ノ行動ニ差支ナキニ至ルモ海峡ニ於テハ 5 月下旬ト雖尚流水ニ滿チ一般船舶ノ航行ハ 6 月ニ入リテ可能トナルヲ普通トス。黒龍海灣ニ於テハ其ノ北口ヨリ先ヅ解氷シ（普通其ノ南方入口ヨリ 1 箇月早シ）海灣内ノ大氷原ハ其ノ流レ居ルヤ否ヤヲ判別シ得ザル程ナルモ潮流ニ從ヒ徐々ニ南北ニ移動シツツ其ノ表面ニ漸次水溜ヲ増加シ風浪ニ從ヒ幾千ノ氷片ニ龜裂シテ流失ス、而シテ黒龍江口ハ概ネ 5 月末開口スト云フ。

この 20 世紀初めの気象データでは、アムール河の河口近くでは、結氷が 11 月中旬、解氷が 6 月ということになる。おおまかにいえば、13 世紀の結氷期は 20 世紀のそれより一ヶ月半ほど早く、解氷は最大で一月ほど遅いということになる。また『癸辛雜識』の叙述が『南村輟耕録』にそのまま引き継がれているということは、アムール河下流域では 13 世紀と同じような寒冷化が、14 世紀も続いていたことを示唆するものといえる。

## 5. おわりに

以上にのべてきたように、13、14 世紀のアムール河下流域では、20 世紀初めの記録に比較して、顕著な寒冷化が見受けられた。しかし、これらの記録は非常に断片的である、また江南の文人が残したものであり、はたしてどの程度まで信頼できるのかという疑問が生ずる。これらの点については今後、諸史料との比較・検討が必要である。本稿では、そのひとつの事例の提供として史料を紹介した次第である。

## 【註】

- 1) 奴兒干は元代には東征元帥府が置かれ、また流刑地とされた。明初の永樂帝の時に宦官のイシハが奴兒干都指揮使司（略して奴兒干都司あるいはヌルゲン都司）を置き、それに奴兒干永寧寺を併設した

ことで知られている。これまで奴児干は「ヌルカン」あるいは「ヌルガン」と呼ばれてきたが、「ヌルゲン」がより正しいようである〔中村 2021a : 171(16)~170(17)〕。

2) 台湾の中央研究院が公開している「兩千年中西曆轉換」を利用した。

<https://sinocal.sinica.edu.tw/> (2021年9月20日参照)

#### 【引用文献】

神田信夫・山根幸夫編（1989）『中国史籍解題辞典』燎原書店。

周密（1988）『癸辛雜識』（唐宋史料筆記叢刊）中華書局。

水路部（1930）『西伯利亞東岸水路誌』第1巻。

薛磊（2012）「“女直水達達” 積名」薛磊『元代東北統治研究』社会科学文献出版社 115~120 ページ

宋濂（1976）『元史』中華書局。

陶宗儀（1959）『南村輟耕録』（元明筆記史料叢刊）中華書局。

中塚武監修、伊藤啓介・田村憲美・水野章二編（2020）『気候変動と中世社会』（気候変動から読みなおす日本史4）臨川書店。

中村和之（2020）「『混一図』に描かれた北東アジア」村岡倫編『最古の世界地図を読むー『混一疆理歴代国都之図』から見る海と陸』（龍谷大学アジア仏教文化研究叢書16）法藏館 81~102 ページ

中村和之（2021a）「『諏方大明神画詞』の『唐子』をめぐる試論」『国際日本学』第18号 186(1)~168(19)ページ。

中村和之（2021b）「モンゴル帝国と北の海の世界」櫻井智美・飯山知保・森田憲司・渡辺健哉編『元朝の歴史ーモンゴル帝国期の東ユーラシア』（アジア遊学256）239~250 ページ。

劉迎勝（2010）「《混一疆理歴代国都之図》中的五国城等地」劉迎勝主編『《大明混一図》与《混一疆理図》研究ー中古時代后期東亞的寰宇図与世界地理知識一』鳳凰出版伝媒集団・鳳凰出版社 51~75 ページ。

表1. 1264年から1286年間の旧暦4月、5月、8月の西暦換算の結果

番号	旧暦	西暦	旧暦4月を西暦に換算		旧暦5月を西暦に換算		旧暦8月を西暦に換算	
1	中統5/ 至元元年	1264年	4月28日	～ 5月26日	5月27日	～ 6月25日	8月23日	～ 9月21日
2※1	至元2年	1265年	4月18日	～ 5月16日	5月17日	～ 6月14日	9月11日	～ 10月10日
3	至元3年	1266年	5月7日	～ 6月4日	6月5日	～ 7月3日	9月1日	～ 9月29日
4	至元4年	1267年	4月26日	～ 5月24日	5月25日	～ 6月23日	8月22日	～ 9月19日
5	至元5年	1268年	5月14日	～ 6月11日	6月12日	～ 7月11日	9月9日	～ 10月7日
6	至元6年	1269年	5月3日	～ 6月1日	6月2日	～ 6月30日	8月29日	～ 9月27日
7	至元7年	1270年	4月22日	～ 5月21日	5月22日	～ 6月19日	8月18日	～ 9月16日
8	至元8年	1271年	5月11日	～ 6月8日	6月9日	～ 7月8日	9月6日	～ 10月5日
9	至元9年	1272年	4月29日	～ 5月28日	5月29日	～ 6月26日	8月25日	～ 9月23日
10	至元10年	1273年	4月19日	～ 5月17日	5月18日	～ 6月15日	9月13日	～ 10月12日
11	至元11年	1274年	5月8日	～ 6月5日	6月6日	～ 7月5日	9月2日	～ 10月1日
12	至元12年	1275年	4月28日	～ 5月26日	5月27日	～ 6月24日	8月23日	～ 9月20日
13	至元13年	1276年	5月15日	～ 6月13日	6月14日	～ 7月12日	9月10日	～ 10月8日
14	至元14年	1277年	5月5日	～ 6月2日	6月3日	～ 7月2日	8月31日	～ 9月28日
15	至元15年	1278年	4月24日	～ 5月22日	5月23日	～ 6月21日	8月20日	～ 9月18日
16	至元16年	1279年	5月12日	～ 6月10日	6月11日	～ 7月10日	9月8日	～ 10月6日
17	至元17年	1280年	5月1日	～ 5月29日	5月30日	～ 6月28日	8月27日	～ 9月25日
18※2	至元18年	1281年	4月20日	～ 5月18日	5月19日	～ 6月17日	8月16日	～ 9月13日
19	至元19年	1282年	5月9日	～ 6月6日	6月7日	～ 7月6日	9月3日	～ 10月2日
20	至元20年	1283年	4月29日	～ 5月27日	5月28日	～ 6月25日	8月24日	～ 9月21日
21※1	至元21年	1284年	4月17日	～ 5月16日	5月17日	～ 6月14日	9月11日	～ 10月9日
22	至元22年	1285年	5月6日	～ 6月4日	6月5日	～ 7月3日	9月1日	～ 9月29日
23	至元23年	1286年	4月25日	～ 5月24日	5月25日	～ 6月22日	8月21日	～ 9月19日
24	平均		5月1日	～ 5月29日	5月30日	～ 6月28日	8月30日	～ 9月28日

※1 閏5月は除外した。

※2 閏8月は除外した。